ART LAB AICHI 2020-2022

ART LAB AICHI

Report

2020

2021

2022

ART LAB
AICHI

アートラボあいち
2020-2022 報告書

ART LAB AICHI

アートラボあいち
2020-2022 報告書

ART LAB AICHI

アートラボあいちとは

アートラボあいちは、国際芸術祭「あいち」を始めとした、現代アートを中心とする情報を収集し、発信する拠点です。
展覧会や様々なプログラムを実施し、愛知県内の芸術系大学や地域の文化機関と連携した芸術活動を共に実践しています。ここでの活動を通じて、「文化芸術の発展」、「文化芸術の日常生活への浸透」、「地域の魅力向上」を目指します。

3 つのキーワード

アートラボあいちでは、アートをちょっと掘り下げてみたり、少し違う角度から見てみたり、別の方向から聞いてみたりすることで、新たな創造の場、新たな発見の場、新たなつながりの場となるような活動を行います。そのために、次の 3 つのキーワードを起点に展開しています。

laboratory

実験的な創造・創作：ラボラトリー

learning

ともに学び考える：ラーニング

collaboration

連携・協働の創出：コラボレーション

連携大学

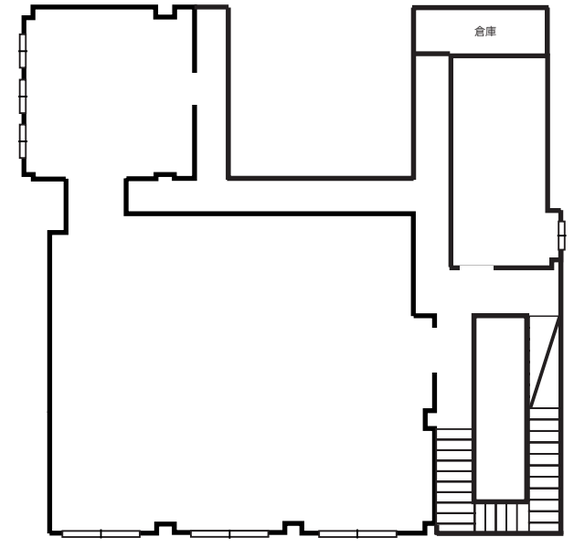
愛知県立芸術大学／名古屋芸術大学／名古屋造形大学／名古屋学芸大学

フロアガイド

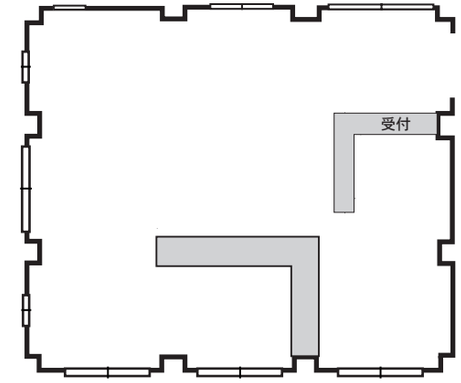
2F
受付
ライブラリ
イベント及び展示スペース

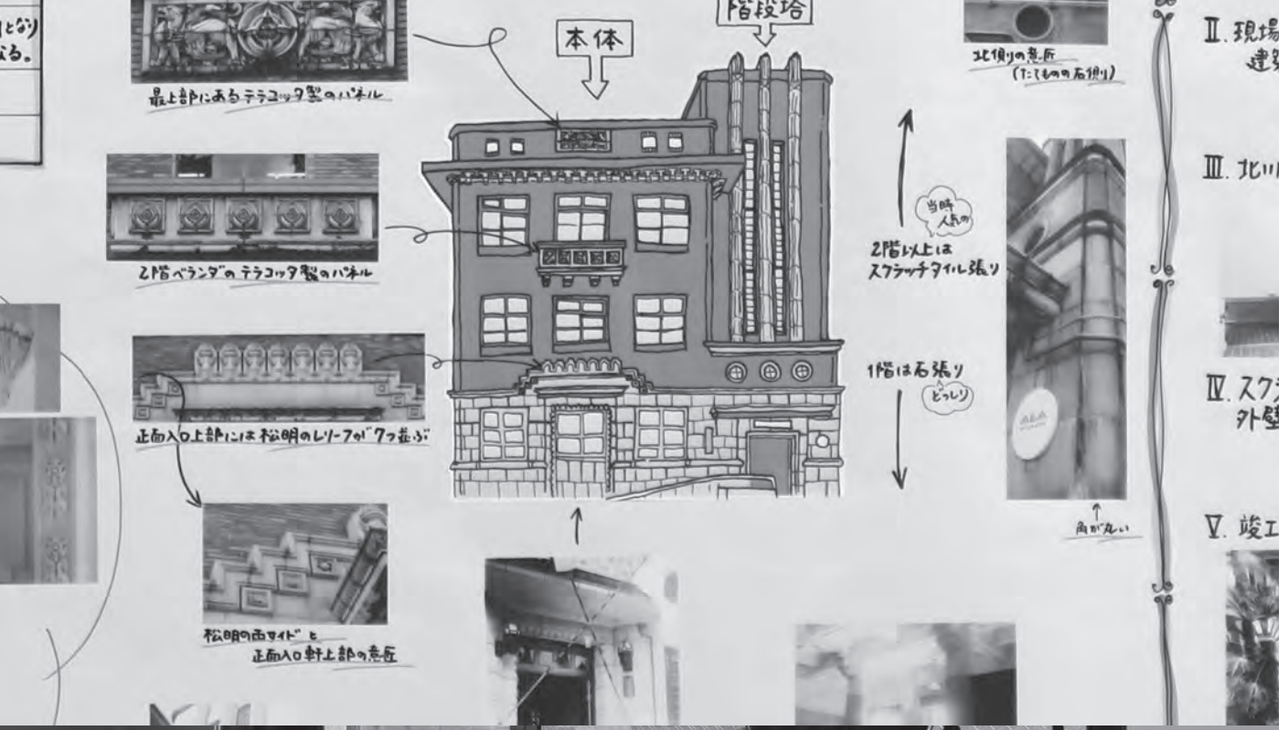
3F
展示室

3階



2階





アートラボあいち概要 2

活動一覧 6

活動の記録 2020 8

2021 20

2022 32

アートマネジメントアカデミー 60

アートラボあいちのプログラムの変遷からみる
まなびの場としてのアートセンター　服部浩之 65

プロフィール 68

運営体制 73

アートラボあいち　活動一覧 2020-2022 年度

自主企画

さとうくみ子「ハッピーセット」
2021 年 12 月 3 日（金）～ 2022 年 1 月 23 日（日）

国際芸術祭「あいち 2022」芸術大学連携プロジェクト「アートラボあいちと四芸大による連続個展」
スズキアヤノ「SPRING&SUMMER COLLECTION」
2022 年 7 月 30 日（土）～ 8 月 14 日（日）
大野未来「片隅で◯になる」
2022 年 8 月 20 日（土）～ 9 月 4 日（日）
山田憲子「うみになる」
2022 年 9 月 10 日（土）～ 9 月 25 日（日）
杉谷遊人「語源は話す、いくつかの方法」
2022 年 10 月 1 日（土）～ 10 月 16 日（日）

アートマネジメントアカデミー 2020-2021
2020 年 12 月～ 2022 年 1 月

アートマネジメントアカデミー 2022
2022 年 4 月～ 2023 年 2 月

愛知県立芸術大学

ら抜きの仕草
2020 年 7 月 23 日（木・祝）～ 8 月 30 日（日）

メガネかえてみる？　ジェンダー、身体、伝統を疑う
2021 年 9 月 17 日（金）～ 10 月 17 日（日）

GROUND3 絵画のふつう ー ふつうの絵画
2023 年 2 月 25 日（土）～ 3 月 26 日（日）

名古屋芸術大学

task
2020 年 11 月 27 日（金）～ 12 月 20 日（日）

Street Capturing in Nagoya
藤幡正樹×名古屋芸術大学
2022 年 3 月 11 日（金）～ 3 月 27 日（日）

舞台を見つめる ~ 言葉と身体と音が織りなすドラマ ~
2023 年 1 月 21 日（土）～ 2 月 19 日（日）

名古屋造形大学

流れて描く
2020 年 9 月 25 日（金）～ 10 月 18 日（日）

ふへほ展
2021 年 7 月 16 日（金）～ 8 月 15 日（日）

天才の幽霊
2022 年 12 月 16 日（金）～ 2023 年 1 月 15 日（日）

名古屋学芸大学

風景をうつす／ Reflecting the landscape and memory
2022 年 11 月 5 日（土）～ 12 月 4 日（日）

連携協力

メセナ事業におけるメディアアート展示アーカイブ
2021 年 1 月 15 日（金）～ 2 月 14 日（日）

甕々の声 (AICHI ⇆ ONLINE オンサイト＆オンライン彫刻プロジェクト）
2021 年 2 月 26 日（金）～ 3 月 28 日（日）

Multichannel Electroacoustic Sound マルチチャンネル電子音響コンサート
2022 年 9 月 18 日（日）

甕々の声 会場風景

task 会場風景

2020

ら抜きの仕草

アーティスト｜谷澤紗和子、近藤佳那子、後藤あこ
会期｜ 2020 年 7 月 23 日（木・祝）～ 8 月 30 日（日）
会場｜アートラボあいち 2 階、3 階
企画｜大﨑のぶゆき（美術家・愛知県立芸術大学准教授）
主催｜愛知県公立大学法人愛知県立芸術大学、あいちトリエンナーレ実行委員会

出品作家のジェンダーの平等を掲げた「あいちトリエンナーレ 2019」。しかし『表現の不自由展・その後』を取り巻く問題もあり、その意義について考える機会が少なかったように感じています。昨今の美術大学や芸術大学では女性が学生の多くを占め、本学においても 8 割ほどの学生が女性です。一方、現代のアートシーンのプレイヤーを男性が多く占めていることは「あいちトリエンナーレ 2019」で示された資料※により明らかでしょう。
これらの状況を踏まえながら、本展では女性のアーティストや活躍する女性の卒業生に焦点をあてる機会として近年「女性と社会」について考える作品を制作する谷澤紗和子氏をゲストアーティストとして招き、本学出身の近藤佳那子、後藤あこの二人の若手作家と共に、展覧会『ら抜きの仕草』を開催しました。
※「あいちトリエンナーレ 2019」資料 | 美術業界における主な男女比

『ら抜きの仕草』
今回出品作家との対話の中で、それぞれが感じる「女性」というラベリングについて、またアートシーンのジェンダーにおける「ニュートラル」について意見を交わしました。
本展の彼女たちの仕草として、普段と同様にそれぞれの問題意識から作品を制作して展覧会をつくります。出品作家たちと決めたこの展覧会タイトル『ら抜きの仕草』は、「られる」「らる」を抜く古典的な日本語としては間違った言葉「ら抜き言葉」から転用されています。現代語において進化した言葉と捉えることができるでしょう。私たちが「ニュートラルの本質」について考えること。「ら抜き言葉」が私たちにとって普通であるように、ジェンダーについても考えること。『ら抜きの仕草』とは企画者の私も含めて、鑑賞者自身に向けられているのです。

大﨑のぶゆき
（本展企画／美術家・愛知県立芸術大学准教授）

アーティストトーク
新型コロナウイルス感染拡大防止のため事前収録した、3 作家がそれぞれ自作の前で行ったアーティストトーク映像を 2 階に設置したモニターとオンラインで会期中に上映しました。
https://youtu.be/pBEUCuzqraA

流れて描く

アーティスト｜近藤香里、柴崎あかり、山口由葉
会期｜ 2020 年 9 月 25 日（金）～ 10 月 18 日（日）
会場｜アートラボあいち 3 階
作家選抜｜平林薫（名古屋造形大学教授）
主催｜名古屋造形大学、国際芸術祭「あいち」組織委員会

名古屋造形大学の卒業生で、主に絵画作品を制作しているアーティスト 3 名による展覧会。ドローイングからキャンバスに描かれた絵画までを展示しました。

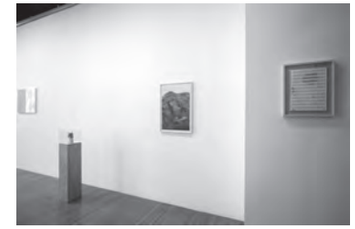
時間が流れて 点を打って また流れて 線を引いて 面を塗って 離れて
近づいて 描いた絵を また時間が流れて 遠くで眺めて はっとしたときのように 毎日 朝目が覚めて 絵のことを考えるのを 繰り返す そういう同じに見える 川の流れみたいな 線を また 一本 引く

山口由葉

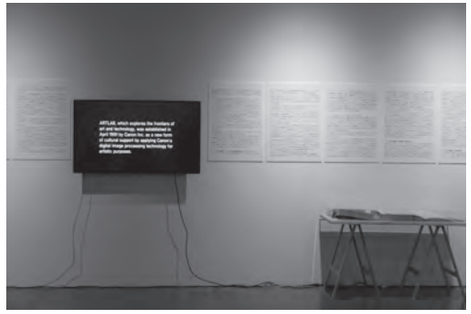
task

アーティスト｜青田真也、青木一将、秋吉風人、大田黒衣美、田村友一郎、西田雅希、三宅砂織、本山ゆかり、吉田有里、渡辺英司
会期｜ 2020 年 11 月 27 日（金）～ 12 月 20 日（日）
会場｜アートラボあいち 2、3 階
企画｜名古屋芸術大学 美術領域
主催｜名古屋芸術大学、国際芸術祭「あいち」組織委員会
協力｜ AOYAMA | MEGURO、WAITINGROOM、KAYOKOYUKI、KENJI TAKI GALLERY、TARO NASU、Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]、ミラクルファクトリー、Yuka Tsuruno Gallery、Yutaka Kikutake Gallery、株式会社 堀内カラー

名古屋芸術大学は、2021 年度に新たに現代アートコースが創設されました。 新型コロナウイルスの蔓延や世界の情勢に揺らぎのあるいま、世界を捉える力が問われています。現代アートとは、美術史や歴史の文脈に寄り添いながら、どのような文脈の上に立脚し、自らの問いを作品を通して現代の社会に投げかけるというダイナミックな実践であり実験とも言えます。
このプロジェクトでは、名古屋芸術大学にて美術教育に携わる 10 名の仕事を紹介しました。



メセナ事業における メディアアート展示 アーカイブ



会期｜ 2021 年 1 月 15 日（金）～ 2 月 14 日（日）
会場｜アートラボあいち 2 階、3 階
主催｜愛知県立芸術大学
協力｜国際芸術祭「あいち」組織委員会
助成｜文化庁
資料提供｜キャノン株式会社、株式会社資生堂、スパイラル／株式会社ワコールアートセンター

愛知県立芸術大学「1985 ～ 2005 年の企業メセナによるメディアアート展示資料のアーカイブ事業」による《メセナ事業におけるメディアアート 展示アーカイブ》展
1980 年代、経済の好況を受けて、映像情報系の企業を中心としたアートサポートが見られるようになり、企業メセナとして具体的なサポートも始まった。90 年代以降はインターネットが普及しはじめ、情報と社会をテーマとするメディアアート作品も発表された。インパクトのある展示が多くあったが、そのような作品保存が難しい時期でもあった。企業メセナによる 1985 ～ 2005 年間に発表されたメディアアート活動の調査を対象とし、そのうち現在ファクトデータが公開されていない企業 3 社によるメセナ活動をメインに資料調査とデータアーカイブを進め、その概要を明らかにし、作品データの修復やインスタレーションの体験的情報のアーカイブを進める。

芸術講座

『メディアアートにおけるメセナ事業と展示 / キヤノン・アートラボと資生堂サイバーギャラリー・CyGnet について』
ゲスト｜四方幸子（キュレーター）
1 月 30（土）14：00 ～ 15：30

甕々の声

（AICHI ⇆ ONLINE オンサイト＆オンライン彫刻プロジェクト）

アーティスト｜黒川岳
会期｜ 2021 年 2 月 26 日（金）～ 3 月 28 日（日）
会場｜アートラボあいち 3 階
展示企画｜西田雅希
主催｜愛知県（文化芸術活動緊急支援事業 / アーティスト等緊急支援事業）
オンライン・アートプロジェクト「AICHI ⇆ ONLINE」
企画制作｜ SAAC[Sustainable Arts Activity Cooperative]

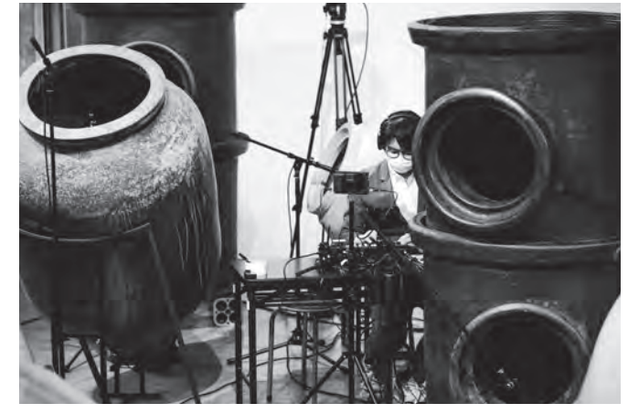
常滑市で長く生産されてきた大甕は、水甕から音響装置、燃料タンクに至るまで、多種多様な場面で活躍してきました。実用的役目を終え、街なかや資料館で静かに眠る彼らの圧倒的な物量は、その内部にある巨大な空洞と直結しています。それは、コロナ禍において突如として私たちの日常に出現した空洞を想起させ、また誰もが心身の内部に持つさまざまな空洞とも呼応するかのようです。
本プロジェクトでは、「とこなめ陶の森資料館」（愛知県常滑市）所蔵の大甕と土管を、戦前の常滑焼タイル装飾が今なお生きる「アートラボあいち」（名古屋市）に運び込み、甕々の「声」を通じて我々が直面する数々の void（空洞）にアプローチするサウンド・インスタレーションをオンサイトとオンラインで展開しました。

プログラム｜「甕々のひびき」

会期中、展示会場の甕の中の音を常時配信しました。

「甕々のための音楽会」

2 月 28 日（日）17：30 ～ 19：00
出演｜アキビンオオケストラ、綾部曜子、黒川岳
展示室内で開催された音楽会をライブ配信しました。



ふへほ展 会場風景

メガネかえてみる？ジェンダー、身体、伝統を疑う 会場風景

2021

ふへほ展

アーティスト｜蓮沼昌宏、鷲尾友公
会期｜ 2021 年 7 月 16 日（金）～ 8 月 15 日（日）
会場｜アートラボあいち 3 階
企画｜佐藤克久（美術家・名古屋造形大学准教授）
主催｜名古屋造形大学、「ふへほ展」実行委員会、国際芸術祭「あいち」組織委員会

絵画やアニメーション、キノーラ装置などを表現手法として活動する蓮沼昌宏と、ジャンルや手法の区別なく独自の文脈で作品を制作してる鷲尾友公による、初めての二人展を開催しました。単管を組み上げて迷路のような空間を展示室に作り出し、その中に二人の作品が所狭しと並びました。

「ふへほ」とは？
は行を分割するなら「はひ・ふへほ」がよい。
「はひふ･へほ」もすてがたいのだが、余韻がなくあじけないので「はひ・ふへほ」に分がある。
三分割ならば「はひ・ふ・へほ」になるだろう。
ほんとうは「は・ひふ・へほ」が好みだが「ひふ」が皮膚を連想させてしまうのだ。
連想させるのがわるいように書いたがそうでもない。
「はひ」は置いておくが「ふへほ」はなんだか素敵な想像をさせる

佐藤克久
（本展企画／美術家・名古屋造形大学准教授）

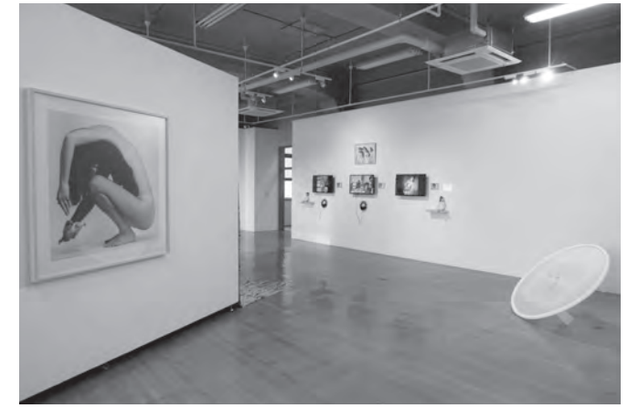
メガネかえてみる？ ジェンダー、身体、伝統を疑う

アーティスト｜遠藤麻衣、伊賀文香、土屋全徹、TEI YOUYOU、楢井真琴、吉中媛香、山本絃美、乾真裕子、岡田夏旺、小牧果南、リー・ムユン
会期｜ 2021 年 9 月 17 日（金）～ 10 月 17 日（日）
会場｜アートラボあいち 3 階
企画｜愛知県立芸術大学岩間賢研究室
企画協力｜東京藝術大学荒木夏実研究室
キュレーター｜荒木夏実 (東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授)
ディレクター｜岩間賢 (愛知県立芸術大学美術学部美術科准教授)
主催｜愛知県立芸術大学、国際芸術祭「あいち」組織委員会

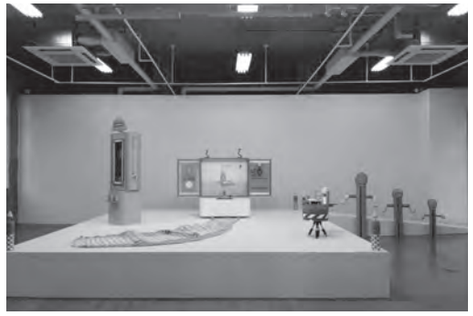
無意識のうちにさまざまな習慣や決まりごとに従って生活している私たち。家庭や学校、職場、友人関係のルールに縛られて、いつの間にかストレスが溜まってしまう経験は誰しもあるでしょう。しかし、当たり前だと思っていることは、見方を変えれば実はそうではないかもしれません。自分自身の中にある色メガネ、すなわちバイアスを取り払って、異なる視点から世の中を見つめ直してみてはどうでしょう。本展では、アートというメガネを通して多様な観点からものごとを捉える試みを行います。女性は結婚するべき？女性の身体について語ることはタブー？人間は動物になれない？旅は身体の移動が伴う？家族とは？宗教とは？アーティストたちはさまざまな問いを提示し、あらゆる可能性を形にします。
本企画はゲストにキュレーターの荒木夏実氏とアーティストの遠藤麻衣氏を迎え、愛知県立芸術大学の学生たちとジェンダーや身体、家族などについて議論しながら構成しました。展覧会には東京藝術大学の学生によるジェンダーや身体性に着目した作品も出品されます。このようなコラボレーションによって多様な問いと視点が交錯し、未来への可能性が見えてくることを期待しています。

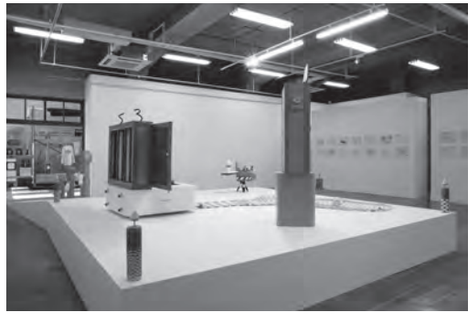
愛知芸大芸術講座
「アートとジェンダーをめぐって」

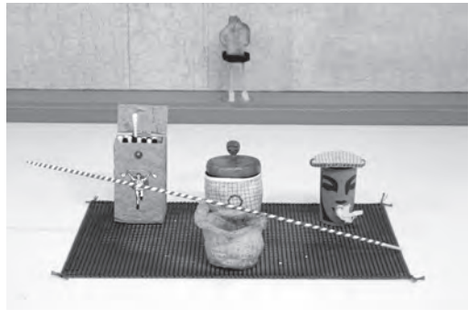
日時｜ 9 月 18 日（土）13：00 ～ 16：30
ゲスト｜遠藤麻衣、荒木夏実
ゲストアーティストである遠藤麻衣によるアーティストトーク「私はなぜ蛇になるのか」と、キュレーターの荒木夏実によるレクチャー「アートを取り巻くジェンダーの問題」をアートラボあいちで実施し、その様子を YouTube で配信した。



さとうくみ子
「ハッピーセット」







アーティスト｜さとうくみ子
会期｜ 2021 年 12 月 3 日（金）～ 2022 年 1 月 23 日（日）
会場｜アートラボあいち 3 階
プログラム企画・運営｜服部浩之、アートマネジメントアカデミー 2020-2021 メンバー［小西祐矢、坂井あゆみ、田中しゅう、服部真歩、林みらい、水野優菜］、アートラボあいちスタッフ［近藤令子、半澤奈波、岡本涼伽、小川愛、城所豊美］
グラフィックデザイン｜加瀬透
主催｜国際芸術祭「あいち」組織委員会、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学

アートラボあいちは、愛知県内の芸術大学や文化機関と連携し、この地域に所縁のある表現者の制作や発表を支援する活動を続けています。その一環として、2020 年に愛知県立芸術大学大学院を修了し、現在は岐阜県を拠点とするさとうくみ子の展覧会を開催しました。
さとうは、絵画、ドローイング、オブジェや映像などを組み合わせた作品を制作しています。くみ子とグリコの語感が近いことからグリコのゴールイン・マークを「クミコ」に置き換えたキャラクターをしばしば作品に登場させたり、身近で安価な素材を組み合わせて祭壇をパロディするような不思議な収納型オブジェを組み上げたりと、ユーモアのあるアイロニーがぴりりと効いた独自の世界を築いています。
今回は、約 1 ヶ月間アートラボあいちで滞在制作を実施し、制作期間中にはアートマネジメントアカデミーのメンバーもサポートに加わり、自作の奇妙な一輪車で色々な場所をめぐるシリーズ《一周まわる》の新作や耳掘りをテーマにした作品群を制作しました。展示では、様々なオブジェやドローイング、作品の遊び方を紹介する映像作品などが並びました。

オープンスタジオ

11 月 20 日 (土) 13：00 ～ 18：00

アーティストトーク

12 月 4 日 (土) 14：00 ～ 15：00

ワークショップ「なにかとなにかでなにになる？」

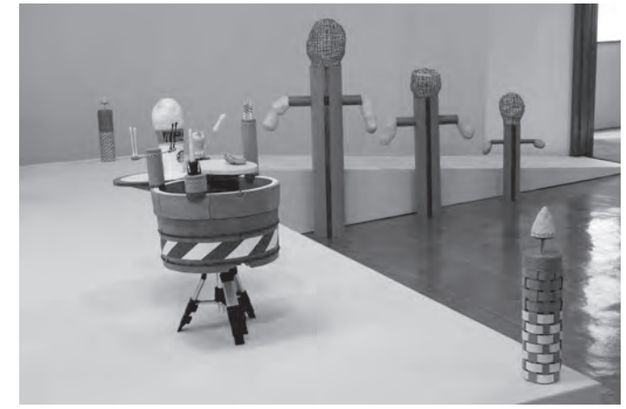
12 月 19 日 (日) 11：00 ～ 12：30 ／ 15：00 ～ 16：30

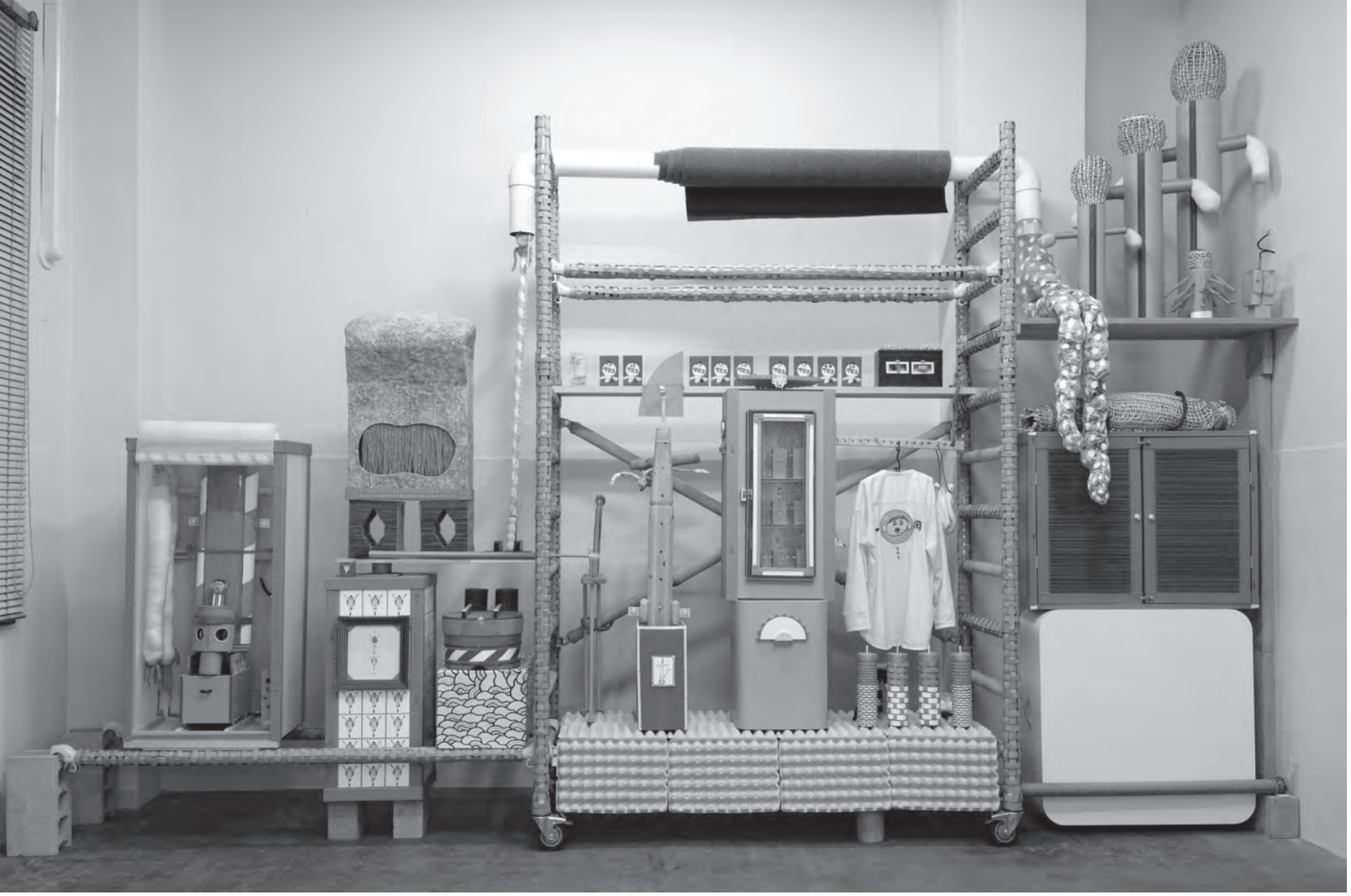
ワークショップ「茶話会」

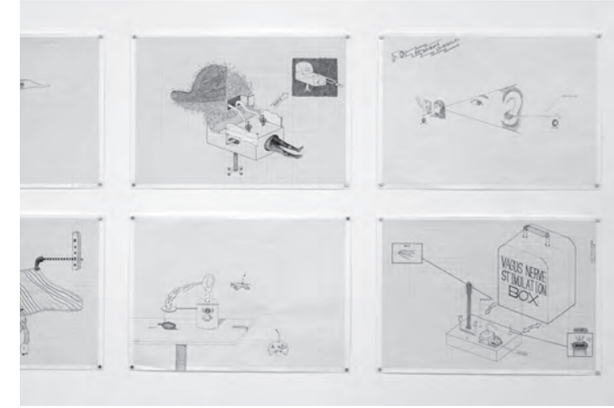
1 月 9 日 (日) 11：00 ～ 12：00 ／ 15：00 ～ 16：00

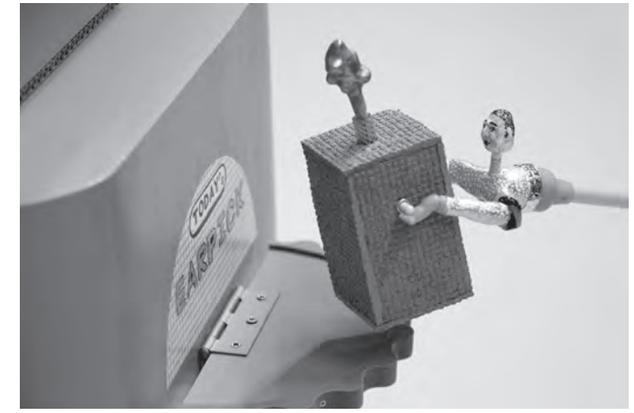
アートマネジメントアカデミーメンバーによる座談会

1 月 23 日 (日) 17：00 ～ 18：30






VAGUS NERVE
STIMULATION
BOX


EASY PICK

Street Capturing in Nagoya 藤幡正樹 × 名古屋芸術大学

アーティスト｜藤幡正樹
Street Capturing in Nagoya ワークショップ参加者｜平山亮太、鈴木朱音、武井夕夏、遠山七海、野村諒華、山形篤輝、郭文姫、竹内創、加藤良将
会期｜ 2022 年 3 月 11 日（金）～ 3 月 27 日（日）
会場｜アートラボあいち 3 階
企画｜名古屋芸術大学　デザイン領域　先端メディア表現コース
主催｜名古屋芸術大学、国際芸術祭「あいち」組織委員会

日常的に目にしていても普段はあまり意識することがない、自分たちが住む街やその中にある様々な事物と自分との関係性について、イメージと AR（拡張現実）技術を介在させて考えてみます。その結果、どのような関係性が見出せるのか、藤幡正樹によるワークショップに参加した名古屋芸術大学の学生による成果物と活動の記録によって紹介します。

ワークショップコンセプト

自分が住む街、街にあるさまざまな事柄、普段意識しないそれらとの関係性について、イメージと AR（拡張現実）技術を介在させて、考えてみる。

旅のおもしろさが、未知の対象への意識の覚醒であるとすれば、日常は対象への無意識に満ちているということである。しかし、目的意識を持って対象を見つめれば、日常もまた旅人的な視線対象へと変容する。かつては、カメラを持って街に出るだけで、街が新鮮に見えたものだが、この感覚さえもがスマートフォン・カメラによって陵辱されてしまった。

ワークショップでは、対象を「刈り取る（Capture）」ことについて再考します。街中にあるさまざまな事柄を探し出し、選びます。それを手で取り上げてポケットに入れます。同時に、その行為をカメラで撮影します。ここまでで 2 重の Capture が生まれます。展示では、その事物を展示し、同時にその切り取り作業そのものの記憶が鑑賞者の視覚によって、3 重に Capture されることになります。

うみになる 会場風景

風景をうつす 会場風景

2022

スズキアヤノ

大野未来

山田憲子

杉谷遊人

Exhibition

国際芸術祭「あいち 2022」芸術大学連携プロジェクト「アートラボあいちと四芸大による連続個展」

アーティスト｜スズキアヤノ、大野未来、山田憲子、杉谷遊人
期間｜ 2022 年 7 月 30 日（土）～ 10 月 16 日（日）
会場｜アートラボあいち 3 階
企画｜企画プロジェクトチーム／猪狩雅則（愛知県立芸術大学）、佐藤克久（名古屋造形大学）、伏木啓、村上将城（名古屋学芸大学）、松村淳子（名古屋芸術大学）、服部浩之、近藤令子、半澤奈波（アートラボあいち）
協力｜岡本涼伽、小川愛、城所豊美（アートラボあいち）、安齋萌実、大石茉幸、小西夏実、平松恭輔、三浦琉聖、光村明莉、森夏音（アートマネジメントアカデミー）
グラフィックデザイン｜永戸栄大
主催｜国際芸術祭「あいち」組織委員会、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学、名古屋学芸大学

本プロジェクトでは愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学、名古屋学芸大学の四大学とアートラボあいちが協働して、各大学教員とアートラボあいちスタッフでチームを組み、各大学を卒業・修了 10 年以内のアーティストを各 1 名ずつ選出し、芸術祭の会期に合わせ個展形式で紹介しました。
選出されたのは 4 名の 20 代の若い作家で、3 部屋で構成されるアートラボあいちの展示室は彼／彼女らにとって新しい挑戦の場となりました。展示を作り上げる過程においては、チームメンバーがメンターとなり、作家たちと対話を重ね展覧会を実現していきました。

スズキアヤノ

SPRING&SUMMER COLLECTION

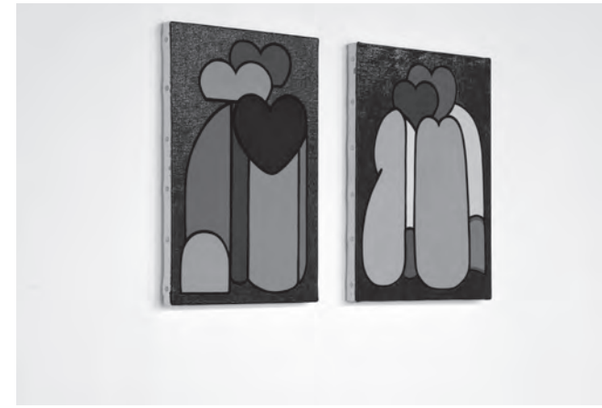
アーティスト｜スズキアヤノ
会期｜ 2022 年 7 月 30 日（土）～ 8 月 14 日（日）

鈴木彩乃さんの絵を見た時、この色、この歪な形、なんだろう。など色々思うことがあります。鈴木さんに何を描いているのか聞いてみても、気の利いた答えがかえってこないかもしれません。でも大丈夫です。自分の中の記憶にある何かに結びつけてみてください。きっとその絵のイメージはいきいきと広がるでしょう。大きな絵というのもちょっとした仕掛けがあるかもしれません。大きな形を視界に入れるために少し後ろに下がると、そのイメージが少し変化するかもしれません。そのイメージの広がりは自分の価値観に任せるとより良いかと思います。きっとそれがその絵の正解なのだと思います。

（推薦者コメント　猪狩雅則）

アーティストトーク

8 月 6 日（土）17：00 ～ 18：00
登壇者｜スズキアヤノ、猪狩雅則（愛知県立芸術大学美術科油画専攻准教授）



大野未来
片隅で◯になる

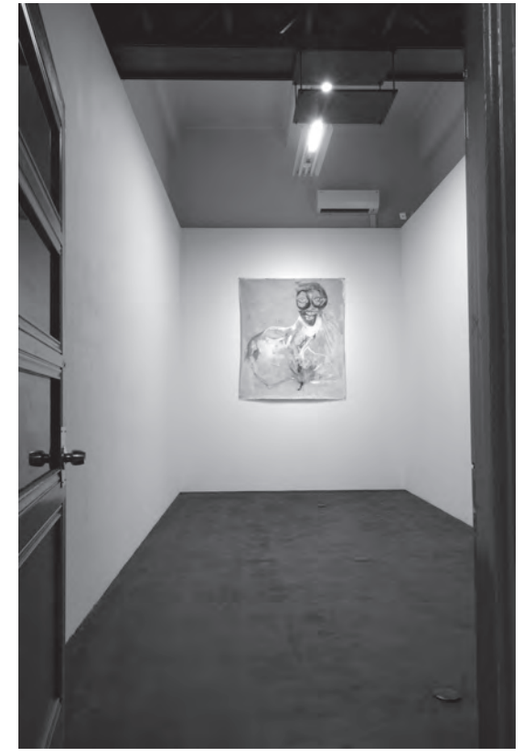
アーティスト｜大野未来
会期｜ 2022 年 8 月 20 日（土）～ 9 月 4 日（日）

大学に入ってから本格的に描き始めたという大野は、わずか数年間で膨大な数の作品を制作しています。新聞紙や画用紙などに描かれた、人とも動物とも言えない奇怪なイメージは、壁のシミや亀裂、影など、偶発的に生まれたカタチや線に想起された印象と、大野の感情をつなげてたちあがってきたものです。日々の細やかな感情が、イメージとつながって心象日記のように作品となって残されていきます。
卒業制作展では百を超える作品で壁面を埋め尽くしました。今回アートラボあいちでは、さらに大きな空間を使い鑑賞者を大野の世界に誘います。

（推薦者コメント　松村淳子）

アーティストトーク

8 月 21 日（日）17:00 ～ 18:30
登壇者｜大野未来、拝戸雅彦（愛知県美術館館長）



山田憲子
うみになる

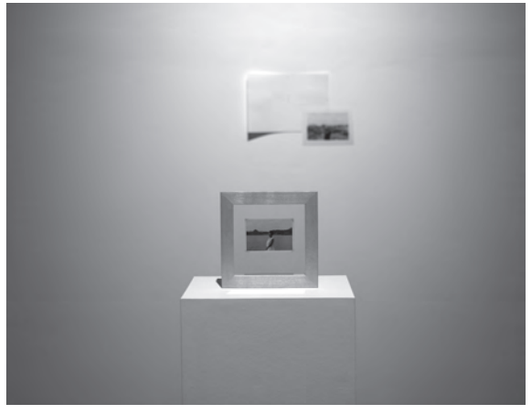
アーティスト｜山田憲子
会期｜ 2022 年 9 月 10 日（土）～ 9 月 25 日（日）

山田憲子さんは名古屋学芸大学映像メディア学科在学中より、一貫して写真をベースにした作品を制作・発表しています。卒業制作として発表した『静かな時間』は、写真とテキストで構成された約 10m もの蛇腹状の折本で、母親との往復書簡を軸に、これまでの二人の時間と関係を紡ぎ直すという作品でした。以降も、彼女は、自身を取り巻く人やモノと対峙しながら、写真とテキストを扱った作品を展開しています。「かつて」と「いま」を細やかに紡ぐ彼女の眼差しは、普段見過ごしてしまうような日常の機微を掬いあげ、記憶の追体験へと導きます。

（推薦者コメント　村上将城）

アーティストトーク

9 月 11 日（日）17:00 ～ 18:00
登壇者｜山田憲子、中村史子（愛知県美術館学芸員）



杉谷遊人
語源は話す、いくつかの方法

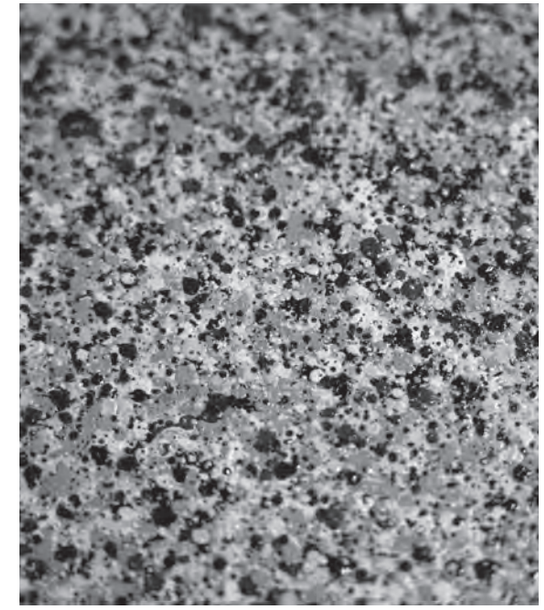
アーティスト｜杉谷遊人
会期｜ 2022 年 10 月 1 日（土）～ 10 月 16 日（日）

杉谷遊人は絵画の問題について取り組んできたフォーマリスティックなアーティストだ。これまで様々なアプローチで絵画の在り方について展開してきた。新しいシリーズである「Tabula」はタブローとテーブルの語源であり板を意味する。ここにおいては確定不可能性という問題意識を作品構造へと組み込むことで、従来とは異なる在り方で成立する絵画の構築を試みている。まだはじまったばかりの展開だが、出自についての矛盾を肯定的に解消していき、その要素を視覚化し展開する様は現在の不穏な社会状況を俯瞰して捉えなおす何らかの契機になるはずだ。

（推薦者コメント　佐藤克久）

アーティストトーク

10 月 15 日（土）18:00 ～ 19:30
登壇者｜杉谷遊人、沢山遼（美術批評家）、千葉真智子（豊田市美術館学芸員）



風景をうつす／

Reflecting the landscape and memory

アーティスト｜弓指寛治、幸洋子、南條沙歩、樋口誠也、伏木啓、村上将城、山本努武、井垣理史
会期｜ 2022 年 11 月 5 日（土）～ 12 月 4 日（日）
会場｜アートラボあいち 2 階、3 階
企画｜名古屋学芸大学
主催｜名古屋学芸大学、国際芸術祭「あいち」組織委員会

本展では、名古屋学芸大学映像メディア造形学部映像メディア学科の卒業生と教員が制作した作品の中から、特定の場や状況の「記録」、または個人的な「記憶」から立ち上げた作品を選び、展示・上映します。本展のタイトルにおける「風景」は、目の前に広がる景観だけでなく、心象風景などの想像や記憶上のイメージが含まれます。
19 世紀に発明された写真や映画は、現実を写すメディアとして発展し、テクノロジーの進化と共に現実を越えるリアリティを創造してきました。映像メディア学科では、これらの映像の歴史を辿りながら、映像に留まらない視聴覚分野全般を研究・教育し、多様な卒業生を輩出してきました。本展では、現代美術、映像／アニメーション、写真の領域で活躍する 4 名の卒業生とともに、視覚メディアと記録／記憶の関わりを、多様な表現手法によって考察しました。

天才の幽霊

アーティスト｜井上暁登、小粥幸臣、MITOS
会期｜ 2022 年 12 月 16 日（金）～ 2023 年 1 月 15 日（日）
会場｜アートラボあいち 2 階、3 階
企画｜佐藤克久（美術家・名古屋造形大学准教授）
主催｜名古屋造形大学、国際芸術祭「あいち」組織委員会

名古屋造形大学を卒業した若手作家 3 人（井上暁登、小粥幸臣、MITOS）による展覧会を開催しました。井上は、木枠に綿布を張った支持体に油絵具やオイルを用いて制作された絵画の他、アートラボあいち 3 階の展示室の窓と同寸の綿布による作品を展示し、小粥は絵画作品と陶器による作品群を、MITOS はキャンバスやダンボールなどの支持体に描いた絵画をそれぞれ展示しました。

コンセプト

天才の幽霊の本領が発揮される時はどのように訪れるのだろうか。その幽霊は天才だ / あの天才が後に幽霊になった。不明瞭な事実を確かめる方法を考えてみよう。それは怪奇現象以前に概念なのだろうか？言い伝えを信じてしまうという前提を疑うのか？これまでの経験を軸に実際に身体を伴う行動にうつすのか？
井上は作品そのものの構造よりもそれが出現する以前の思想を重視する。小粥は言葉や説明に対する不信感からわからなさを確かめるために制作を行う。MITOS は自身の生活や制作の経験を基に実直に絵画制作を展開する。2022/23 年冬、彼らと「天才の幽霊」を確かめる。展覧会は慎重に秩序立てられた混乱状態になるだろう。

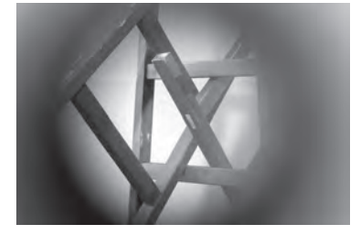
（佐藤克久）

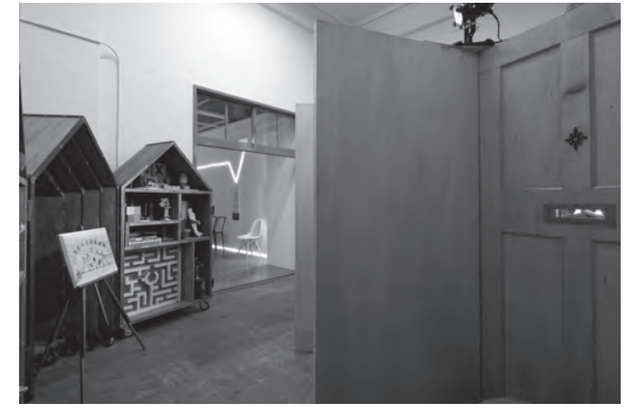
舞台を見つめる

~ 言葉と身体と音が織りなすドラマ ~

展示｜第七劇場、月灯りの移動劇場
会期｜ 2023 年 1 月 21 日（土）～ 2 月 19 日（日）
会場｜アートラボあいち３階
企画｜名古屋芸術大学舞台芸術領域
主催｜名古屋芸術大学、国際芸術祭「あいち」組織委員会

名古屋芸術大学は、2021 年 4 月に舞台芸術領域を開設いたしました。コロナ禍で舞台芸術のあり方を問われる時間は、舞台芸術のあり方を再考する時間とも言えました。文化芸術は人間の営為そのものと言えます。人間は、時の流れの中で、観る側や聴く側と伝える側の境界をつくりましたが、今、自らの手でその境界を飛び越えようとしています。そのスピードはコロナ禍で加速したような気がします。また、境界を飛び越える中で、劇場空間に存在すると思い込んでいた「舞台」がストリートやオンラインなど生活空間にも存在していることに気づきました。時間や空間のフレームのルールは、存在しないのかもしれません。そのような現代社会において、私たち舞台芸術領域は、「舞台」を「立ち止まって考える時間と場所」と捉え、立ち止まって考える誰かの背中をそっと押せる作品づくりが必要だと気付きました。今回の展示では、舞台芸術領域教員でもある鳴海康平と浅井信好がそれぞれ牽引するカンパニー、「第七劇場」と「月灯りの移動劇場」の舞台芸術を紹介しました。





GROUND3

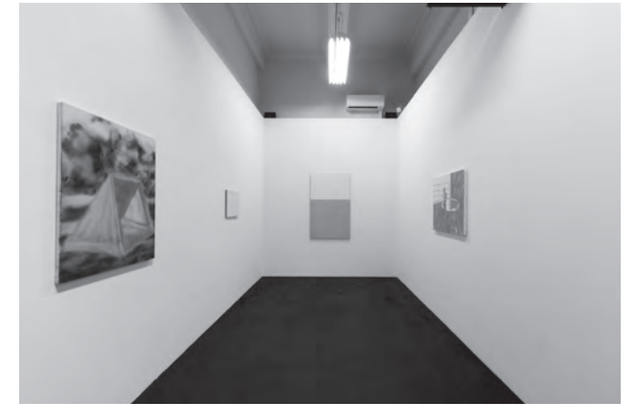
絵画のふつう － ふつうの絵画

アーティスト｜小林孝亘、額田宣彦、丸山直文、高橋信行、猪狩雅則
会期｜ 2023 年 2 月 25 日（土）～ 3 月 26 日（日）
会場｜アートラボあいち 3 階
企画｜ GROUND
主催｜ GROUND 実行委員会、愛知県立芸術大学、
国際芸術祭「あいち」組織委員会

GROUND は、画家の小林孝亘 (1960–)、額田宣彦 (1963–)、丸山直文 (1964–)、高橋信行 (1968–)、猪狩雅則 (1975–) によって 2014 年に結成されました。彼らは「展示」と「対話」をとおして、描く者もみる者も共に絵画をめぐる課題や問いを思考できる場を作ることを目的に活動を続けてきました。本展は彼らの 4 回目の活動にあたります。現代の私たちを取り巻く世界は激変のただなかにあり、人々の価値観はもちろん、当たり前に共有され、理解されてきたはずの常識さえもまた、根底から覆され、変容しています。それは、絵画をはじめ、時代を機敏に捉える芸術表現においても同様でしょう。基軸となるべき「常識」を拠り所にすることができない今、私たちは何を基準に絵画を描き、絵画について思考するのでしょうか。本展では作家の新作を中心とした展示に加えて、作家が絵画の「常識」や「ふつう」とは何かという容易に答えの出ない問いについて思いを巡らせたテーマ展示も行い、展覧会初日にはシンポジウムを開催しました。画家の考える「ふつう」に立ち戻ることから改めて絵画とはなにかを考え、絵画の可能性を開くことを試みました。

シンポジウム

「絵画におけるふつう、あるいは常識」
2 月 25 日（土）13：00 ～ 16：00
ゲスト｜小林孝亘、額田宣彦、丸山直文、高橋信行、猪狩雅則
ファシリテーター｜中村麗、鳥越麻由



2021.11-12 制作

2021.12.19　ワークショップ

アートマネジメントアカデミー

2020-2022

アートマネジメントアカデミー 2020-2021

プログラム概要

アートラボあいちと愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学による大学連携プロジェクトとして実施する人材育成プログラム。
参加する学生は、アートマネジメントアカデミーのプロジェクトメンバーとして、アートラボあいちで開催される企画展を運営することに携わる。展覧会をつくっていくタイムラインを中心に実践での経験を重ねながら、併せて実践内容に即したゼミを受講することで、現場で必要なスキルを学んでいく。また、定期的に読書会を設け、現代美術等に関する基礎知識を増やしていくことも同時に進めた。
参加メンバー｜小西祐矢、坂井あゆみ、田中しゅう、服部真歩、林みらい、水野優菜
活動期間｜ 2020 年 12 月～ 2022 年 1 月

[リサーチ]

愛知にゆかりのある若手アーティストを中心に、リサーチを実施。活動内容、制作や作品などについてインタビューし、レポートにまとめ WEB サイトで公開。

[アーティスト選考]

予算や制作期間、展示期間なども考慮に入れて、インタビューを参考に、企画展参加アーティストを選考。

[ミーティング]

参加アーティストと共に展示企画内容を検討したり、広報物のデザイナーの選考、会期中のプログラム企画などを実施。

[サポート]

展覧会に向けて、制作の補助、搬入・搬出などを実践。

[イベント企画]

メンバーによって企画された、トークやワークショップなどの 6 つのプログラムを実施。

[レクチャー、ディスカッション]

ゲスト講師によるレクチャー。
ゲスト講師によるレクチャーのあと、質問や気になったことを付箋に書き、それを元にゲスト講師を含めディスカッションを実施。

「アーティストのリサーチ方法について、アーティストとの出会い方」
ゲスト｜井高久美子（キュレーター）

「アーティストと共につくるということ」
ゲスト｜吉田有里（MAT, Nagoya プロジェクトディレクター、アートコーディネーター）

「この地域の現代アート」
ゲスト｜小西信之（愛知県立芸術大学教授）、副田一穂（愛知県美術館学芸員）

「インストーラーの仕事について」
ゲスト｜青木一将（ミラクルファクトリー代表、インストーラー）

[読書会]

現代美術に関連する書籍を月 1 回ペースで読み、内容に関しての意見交換を実施。

図書一覧
- クレア・ビショップ「敵対と関係性の美学」、『表象 05』、月曜社、2011 年、pp.75-113
- 藤田直哉「前衛のゾンビたち――地域アートの諸問題」、藤田直哉編著『地域アート　美学 / 制度 / 日本』、堀之内出版、2016 年、pp.11-44
- ティム・インゴルド「第 9 章 線を描く」、ティム・インゴルド『メイキング』、左右社、2017 年、pp.160-300
- 松井みどり「夏への扉：マイクロポップの時代」、松井みどり『マイクロポップの時代：夏への扉』、PARCO 出版、2007 年、pp.28-67
- ロザリンド・E・クラウス「展開された場における彫刻」、『アヴァンギャルドのオリジナリティ モダニズムの神話』、月曜社、2021 年、pp.404-422
- マイケル・フリード「芸術と客体性」、『批評空間モダニズムのハード・コア』、株式会社太田出版、1995 年、pp.66-99
- 高山明「J アート・コールセンターについての演劇的考察」、『テアトロン』、株式会社河出書房新社、2021 年、pp.11-77
- ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代における芸術作品」、『複製技術時代の芸術』、晶文社、1970 年、pp.9-46
- ボリス・グロイス「多重的な作者」、『アートパワー』、現代企画室、2021 年、pp.150-163
- 竹田恵子『生きられる「アート」』、ナカニシヤ出版、2020 年、pp.135-150

Art Management Academy

アートマネジメントアカデミー 2022

プログラム概要

アートラボあいちと愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学、名古屋学芸大学による大学連携プロジェクトとして実施する人材育成プログラム。
アートマネジメントについて多角的に学ぶレクチャーや月１回の読書会、四連続個展のアーティストへのインタビューや、国際芸術祭「あいち 2022」のレビュー作成に取り組んだ。
参加メンバー｜安齋萌実、大石茉幸、小西夏実、平松恭輔、三浦琉聖、光村明莉、森夏音
活動期間｜ 2022 年 4 月～ 2023 年 2 月

[レクチャー]

ゲスト講師によるレクチャー。
ゲスト講師によるレクチャーのあと、質疑応答の時間を設けレクチャー内容をより深めた。

「インタビューについて」
ゲスト｜服部浩之（キュレーター、アートラボあいちディレクター）

「国際芸術祭「あいち 2022」について」
ゲスト｜塩津青夏（国際芸術祭「あいち 2022」プロジェクト・マネージャー）

「レビューの書き方」
ゲスト｜服部浩之（キュレーター、アートラボあいちディレクター）

[読書会]

現代美術に関連する書籍を月 1 回ペースで読み、内容に関しての意見交換を実施。

図書一覧
- クレア・ビショップ「敵対と関係性の美学」、『表象 05』、月曜社、2011 年、pp.75-113
- 藤田直哉「前衛のゾンビたち――地域アートの諸問題」、藤田直哉編著『地域アート　美学 / 制度 / 日本』、堀之内出版、2016 年、pp.11-44
- ハンス・ウルリッヒ・オブリスト「ハラルド・ゼーマン」「ルーシー・リパード」、『キュレーション』、フィルムアート社、2013 年、pp.112-144, pp.280-342
- 中原佑介「美術の批評について」、『第一巻 創造のための批評 ー戦後美術批評の地平 中原佑介美術批評 選集』、株式会社フクイン、2011 年、pp.161-207

アートラボあいちのプログラムの変遷からみる まなびの場としてのアートセンター

服部浩之
（キュレーター｜アートラボあいちディレクター）

アートラボあいちは 2017 年の再出発を機に、実験的な創造･創作（ラボラトリー）、ともに学び考える（ラーニング）、連携・協働の創出（コラボレーション）の 3 つを軸に活動を紡いできました。コロナウィルスの世界的流行、クーデターや戦争などの例を挙げるまでもなく、この六年間で世界の関係は激変し、社会における人の価値観や意識も大きく変わってきました。愛知県においても、あいちトリエンナーレ 2019 などを通じて表現の自由やジェンダーなどに関する社会的平等が広く問われるようになりました。そのような日々変化する周囲の状況に応答すべくチューニングを合わせ、アートラボあいちにおけるプログラム構成は少しずつ変化してきました。

再始動から一年が経った 2018 年には「ともに学び考える」という側面をより強く意識するようになりました。そこでアートラボあいちとあいちトリエンナーレ 2019 ラーニングチームがタッグを組み、アートマネジメント・アカデミーの前身となる人材育成事業「展覧会の体験をデザインする」をスタートさせ、公募で集ったメンバーが短期間で展覧会の企画から実現までのプロセスを体験する場をつくりました。出自や専門、年齢が異なる 20 名程のメンバーが集い、プログラム終了後も彼らのコミュニティが継続され、それぞれにネットワークを築くなどの成果がありました。
あいちトリエンナーレ 2019 の開催年でもある 2019 年には、人材育成事業を継承するかたちで、アーティストの山城大督を共同ディレクターに迎え、建築家辻琢磨も招き、芸術大学連携プロジェクトとして『U27 プロフェッショナル育成プログラム 夏のアカデミー 2019「2052 年宇宙の旅」』を実施しました。このプロジェクトでは、前年の「展覧会の体験をデザインする」参加メンバーから 2 名にメンターとして関わってもらいました。プロジェクトの構造としては、連携大学の愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学から、各大学の在学生や卒業後三年以内の卒業生で 27 歳以下の人を 3 名ずつ推薦してもらい、それに加えて公募で集まった 7 名を交えて、計 16 名のメンバーが参加しました。キュレーション、アーティスト、建築の 3 つのコースに分かれてスタートし、最終的にはチームが 2 つに分裂し、それぞれに発表を行うかたちとなりました。アートプロジェクトにおける摩擦や敵対など､協働の難しさも顕になりましたが、この活動からも小さなコミュニティが生まれ、参加者は新たなプロジェクトを自主的に展開しています。
この 2 年の経験で、プロジェクトの全体像を俯瞰しケアの態度をもってプロジェクトを築き / 紡いでいけるアートマネジメントに取り組む人材の必要性と需要

を強く実感しました。つまり、ものを生み出す表現力や造形力だけでなく、それをどのように誰に届けるのかという視点や、他者の活動をよく見ることから学ぶことも重要だと再認識したのです。そこで、2020 年からはアートマネジメントに主眼を置いた学びと実践の場としてアートマネジメント・アカデミーを実施するに至りました。アートマネジメント・アカデミーは、大学とは異なるオルタナティブで実践的なアートの学びの場をひらくべく芸術大学連携プロジェクトとして、上記三大学から推薦された学生たちが参加し、一年かけてアートラボあいちのスタッフとともに展覧会づくりを体験する場です。第一回目は、2020 年秋から冬にかけてスタートし、展覧会づくりにまつわるレクチャーとディスカッションを様々な専門家を招いて実施したり、現代アートの歴史について学びアートや作品について議論する読書会を定期的に開催しました。また、実践的な活動としてアーティストについてリサーチをし、注目したアーティストにインタビューをして、その作家や作品について学び、インタビューをウェブサイトで公開しました。そして、選出したアーティストの個展の企画運営に携わってもらいました。どんなアーティストと展覧会をつくるか参加学生とアートラボスタッフが議論し、最終的にさとうくみ子さんによる個展「ハッピーセット」を開催しました。学生たちは作家の制作にも積極的に関わり、名古屋造形大学にさとうくみ子さんを招いて制作ワークショップを企画するなど主体的に展覧会づくりにコミットしました。

2022 年には、大学連携プロジェクトに名古屋学芸大学が加わることになり、四大学との連携プロジェクトの一環としてアートマネジメント・アカデミーを開催しました。四大学の教員とアートラボあいちスタッフでプロジェクトチームを形成し、国際芸術祭「あいち 2022」の会期に合わせて各大学から卒業後 10 年以内のアーティストを個展形式で紹介する連続個展を実施し、その展覧会群を企画運営する過程にアートマネジメント・アカデミーの学生たちは関わりました。今回はプロジェクトチームで事前に展示を依頼するアーティストを決定したため、7 名の学生はアーティストが確定した段階からの参加となりました。前年の実践を引き継ぐかたちでレクチャーや読書会を実施するとともに、アーティストへのインタビューも彼らに体験してもらいました。そして、国際芸術祭「あいち 2022」の開催年に重なったこともあって、「あいち 2022」に関するレビューの執筆にも取り組みました。

振り返ると、アートマネジメント・アカデミーは体系的にアートマネジメントを学ぶことを主目的にするものではありませんでした。アートラボあいちのような

アートセンターは、長い年月をかけてひとつの学問を探究する大学とはやはり異なります。アカデミーに参加する四大学の学生たちは、絵画・写真・映像、あるいは音楽や舞台など専門はバラバラですが、多くは実作者として作品制作に取り組んでおり、展覧会のような作品発表の場をつくることを学んできたわけではありません。だからこそ、マネジメント側からアーティストの制作や活動に関与することで、より広い視野で作品をつくり表現することや発表することについて思考を巡らせてほしいと考えました。マネジメントの専門家を育成するというより、展覧会づくりの実務的で具体的な活動に参加することで、それぞれの表現活動をより深めてもらえたらと思っています。アカデミーに参加したことで展覧会づくりそのものに興味をもち、マネジメントやキュレーションに積極的に関わっていきたいという意識が芽生える人がいたら、もちろん歓迎です。

ところで、アートラボあいちは国際芸術祭「あいち」組織委員会という三年毎に夏の数十日間のみ開催される芸術祭の運営組織が担うアートセンターです。アートセンターは恒常的な活動で、特定の期間に予算も人材も集中的に投下されて開催される芸術祭とは本来矛盾するものです。そのため、アートラボあいちは恒常的な活動と瞬間的な盛り上がりの狭間で常に揺れ動いてきました。芸術祭開催年とそうでない年では様々な条件が異なるため、その凹凸や差異があるなかで安定した活動を継続するのは困難を伴うものでした。多くの課題はありますが、それでもここまで続いていることは重要な成果だと思っています。

またアートセンターは、その活動指針や対象がある程度絞られていたとしても、専門的な探究のみに邁進するのではなく、図書館や公民館のような種々雑多な知と経験を求める人に対して開かれた場であってほしいし、安心できるだけでなく、なにか新たな発見のある場でありたいと考えています。今後もアートラボあいちは、取り巻く環境や状況の変化とともに揺れ動くでしょうが、なんとかサバイブしていくことをのぞみます。

Profile

プロフィール

それぞれの展示に関わったアーティスト、キュレーター、企業等の略歴を紹介します。
ここで掲載されるプロフィールは、原則として展示の時点で広報物等に記載された表現のまま掲載しています。そのため、同一人物でも内容が異なる場合があります。

自主企画

さとうくみ子「ハッピーセット」（p.26）
さとうくみ子／ SATO Kumiko

お菓子の包装紙や写真の切り抜きを方眼紙にコラージュした説明書のようなドローイングから着想を得た立体作品を制作する。ドローイング、ダンボールや木材、日用品などを組み合わせたインスタレーションを発表している。立体作品の多くは、分解して箱型に収納することができ、持ち運びが可能な形態へと変化し、形式にとらわれないユーモラスな作品を展開している。
1990 年、岐阜県生まれ。岐阜県在住。2020 年、愛知県立芸術大学大学院美術研究科修士課程油画・版画領域修了。主な展覧会に、2017 年「ラグランジュポイント - ドライブ オン ザ ハーフウェイ -」(GalleryPARC、京都)、2019 年「一周まわる」(エビスアートラボ、愛知)、2021 年「第 24 回 岡本太郎現代芸術賞」展 (川崎市岡本太郎美術館、神奈川)

スズキアヤノ「SPRING&SUMMER COLLECTION」（p.36）
スズキアヤノ／ SUZUKI Ayano

身近に存在している風景やものをモチーフにし、絵画を中心に制作。ドローイングを重ねてかたちを探りながら、ポップな色彩と線によってつくりあげてゆく。描かれているものは、どこか動きだしそうな躍動感があり、存在しているなにかのように思われる。鑑賞者は自然と、自身の中にある風景を思い浮かべながら、絵画を見上げているのかもしれない。" ある " のではなく " いる " と感じられる作品を展開している。
2020 年、愛知県立芸術大学大学院美術研究科修士課程油画・版画領域修了。主な展覧会に、個展「オーガナイザー」(2019 年、伊勢現代美術館 、三重)、「アートフェア東京 -Future Artists Tokyo-」(2019 年、国際フォーラム・寺田倉庫、東京)

大野未来「片隅で○になる」（p.40）
大野未来／ ONO Miko

壁のシミや亀裂、物の影などによって連想されるイメージは自己の感情の姿を映し出す鏡のように存在している。その姿を捉え、描き出すこと観察することを繰り返し行うことによって自分と感情というものとの距離感を掴もうとしている。
2021 年、名古屋芸術大学美術学部洋画コース卒業。主な展覧会に、「3331 ART FAIR」（2021 年、3331 Arts Chiyoda、東京）「DELTA」（2021 年、駒込倉庫、東京）「あわいの視点 vol.2」（2021 年、愛知県美術館、愛知)

山田憲子「うみになる」（p.44）
山田憲子／ YAMADA Noriko

写真を中心に制作。撮影行為によって生まれる対象との関わり、流れる時間から抽出された一瞬である写真を見つめ、反芻する制作を通じ、自身の日常を取り巻く光景や、記憶、体験に対峙する様を作品として提示している。写真に文章を交えながら、冊子、壁面、空間展示など展開方法は作品毎に変化している。
2016 年、名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科卒業。主な展覧会に、個展「遠くに見える山の名前をおしえて」展 (2021 年、白枦、愛知)、グループ展「大名古屋電脳博覧会 2019」(2019 年、名古屋市民ギャラリー矢田、愛知)

杉谷遊人「語源は話す、いくつかの方法」（p.48）
杉谷遊人／ SUGITANI Yuto

タブローの問題を軸に、タブラ（tabula）という語をひとつの芸術形式として捉え制作を行う。ラテン語で「板」を意味する語が、タブローやテーブルを含むさまざまな語に派生・分化したことに注目し、語源にあたるこの語に内在する複数の発現や理論を、共時的に構成しうる事物のあり方をタブラ（tabula）とする。この形式を作品の基本構造として組み込み、従来とは異なる枠組みによるタブローの構築を試みる。
2022 年、名古屋造形大学大学院造形研究科修士課程洋画研究領域修了。主な展覧会に、「day to day」（2018 年、名古屋市市政資料館、愛知）、「清須市第 9 回はるひ絵画トリエンナーレ」（2018 年、清須市はるひ美術館、愛知）

愛知県立芸術大学

ら抜きの仕草（p.10）
谷澤紗和子／ TANIZAWA Sawako

「妄想力の拡張」をテーマに、切り紙と光と陰によるインスタレーションや、貝殻の焼け跡の残る陶人形などを制作する美術作家。美術館や芸術祭での作品発表に加え、祭の装飾、他ジャンルのクリエイターとのコラボレーションなど、さまざまな活動を行う。

近藤佳那子／ KONDO Kanako

2014 年　愛知県立芸術大学美術研究科博士課程前期油画・版画領域 修了。
繰り返す日々の無駄と進んでいく力を愛おしく感じ、制作と労働、私と他者、向こうとこちら、絵の具の物性や平面と立体、地と図、など相反したり交わったりする事柄をもとに制作している。

後藤あこ／ GOTO Ako

2014 年　愛知県立芸術大学美術研究科博士課程前期彫刻領域 修了。
大衆演劇の一家に育った経験から、ストーリーの表と裏に着目した彫刻やインスタレーションを発表。近作では彫刻に舞台要素をかけ合わせ、具象彫刻とストーリーの正体を問う作品を展開する。

メガネかえてみる？　ジェンダー、身体、伝統を疑う（p.24）
遠藤麻衣／ ENDO Mai

東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻博士後期課程修了。自身の結婚をテーマにした《アイ・アム・ノット・フェミニスト！》（2017）をはじめ、演劇や映像など自らの身体を通した表現によって、社会規範に対する軽やかな問題提起を行う。主な展覧会に「ルール？」（21_21 DESIGN SIGHT、2021）「彼女たちは歌う」（東京藝術大学大学美術館 陳列館、2020）など。

伊賀文香／ IGA Fumika

愛知県立芸術大学大学院美術研究科博士後期課程在学。平面、立体、映像などを用いながらインスタレーション作品を制作する。普段の生活や訪ねた土地で、五感や身体を通して記憶されたものや浮かび上がる物語性を組み合わせ、渾然一体となるもうひとつの日常や出来事の可視化を試みた作品を制作する。

土屋全徹／ TSUCHIYA Masamichi

愛知県立芸術大学大学院美術研究科博士前期美術専攻油画・版画領域在学。ストレス、違和感などから、自身を取り巻く環境をきっかけに作品形態に捉われずに制作。現在は、家業であるお寺の跡継ぎ問題をもとに、家や伝統、教育などのことについて考える。

TEI YOUYOU

愛知県立芸術大学美術学部美術科研究生として在学。性別は自然のことではなく、社会によってつくられた存在だと考え、人間の日常生活から、性別観念に関することを表現する。

楢井真琴／ NARAI Makoto

愛知県立芸術大学大学院美術研究科博士前期美術専攻油画・版画領域在学。自身の感情や防衛規制と向き合う体感型の作品を制作している。卒業作品では、傷付く事から立ち上がるための装置「ゴーゴー・マシン」を制作し神戸財団賞を受賞。

吉中媛香／ YOSHINAKA Himeka

愛知県立芸術大学美術学部美術科（油画専攻）卒業。自身の私生活における他者依存の傾向や心理学的観点をベースとして活動をはじめる。精神や心というソフト面と、脳や肉体というハード面の結びつきや心身相関の問題から社会を見つめ、絵画やインスタレーションにて表現する。

山本絃美／ YAMAMOTO Itomi

愛知県立芸術大学大学院美術研究科博士前期美術専攻油画・版画領域修了。自身の日常を問い直し、そこに潜む歴史の再帰性を発見することについて制作する。

乾真裕子／ INUI Mayuko

東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程在学。フェミニズムの視点によるパフォーマンスを用いた映像作品を制作。母親との対話を通して生まれた《月へは帰らない》（2020）を卒業・修了作品展に出品し、平成芸術賞を受賞。

岡田夏旺／ OKADA Kao

2001 年東京都生まれ。東京藝術大学先端芸術表現科在籍。 誰もが密かに抱える孤独やだらしなさや欲求を肯定的に捉え、共有するための装置を制作する。その装置に人が関わること、またその様子を記録することを主軸にして、立体や写真、映像など様々な手法を用いて表現している。

小牧果南／ KOMAKI Kanan

ブラジルとスペインに留学後、日本に帰国。現在、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科在学。クラシックバレエや、多重言語の経験をきっかけに、自己を形成しているものは何かという疑問を持つ。身体の在処などをテーマに制作をし、写真やパフォーマンス、立体など様々なメディアを通して人間の身体や物質の不確かさについて考える。

リー・ムユン／ LI Muyun

中国上海生まれ。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科 3 年生。人間の「平凡さ」を語る映像、ドキュメンタリー、ラジオドラマなどのタイムベースト・メディアを用いて作品を制作している。現在は、自身のことより他者の物語を語ることに関心がある。

荒木夏実／ ARAKI Natsumi

慶應義塾大学文学部卒業、英国レスター大学ミュージアム・スタディーズ修了。2018 年まで三鷹市芸術文化振興財団、森美術館で現代美術のキュレーターとして展覧会および教育プログラムの企画を行う。2018 年より東京藝術大学准教授。主な展覧会企画に「居場所はどこにある？」（2021）「彼女たちは歌う」（2020）（以上東京藝術大学大学美術館 陳列館）「六本木クロッシング 2016：僕の身体、あなたの声」など

GROUND3 絵画のふつう ー ふつうの絵画（p.58）
小林孝亘／ KOBAYASHI Takanobu

1960 年東京都生まれ。1986 年愛知県立芸術大学美術学部油画科卒業。現在、武蔵野美術大学造形学部油絵学科教授。近年の主な展覧会 に、2022 年「サンセット／サンライズ」「小林孝亘　新作展『真昼』」豊田市美術館（愛知）。個展「雲と影」西村画廊（東京）、2020 年「眠り展 : アートと生きること ゴヤ、ルー ベンスから塩田千春まで」東京国立近代美術館、2015 年「画家の詩、詩人の絵」平塚市美術館（神奈川）他巡回。

額田宣彦／ NUKATA Nobuhiko
1963 年大阪府生まれ。1990 年愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。 現在、愛知県立芸術大学美術学部油画専攻教授。近年の主な展覧会に、2021 年「コレクション展：ひとつの複数の世界」豊田市美術館（愛知）、2018 年個展「F.P.M.S.」HAGIWARA PROJECTS（東京）、2014 年「開館 20 周年記念 MOT コレクション特別企画クロニクル 1995-」東京都現代美術館。

丸山直文／ MARUYAMA Naofumi
1964 年新潟県生まれ。1990 年 B ゼミスクーリングシステム修了。現在、武蔵野美術大学造形学部油絵学科教授。近年の主な展覧会に、2022 年個展「水を蹴る」シュウゴアーツ（東京）、2022 年「DOMANI・明日展 2022-23」国立新美術館（東京）、2019 年「モネ それからの 100 年」名古屋市美術館（愛知）／横浜美術館（神奈川）、2018 年個展「ラスコーと天気」シュウゴアーツ（東京）

高橋信行／ TAKAHASHI Nobuyuki
1968 年神奈川県生まれ。1991 年愛知県立芸術大学美術学部油画科卒業。現在、愛知県立芸術大学美術学部油画専攻教授。近年の主な展覧会に、2020 年個展「Seven Suns」Rena Bransten Gallery（サンフランシスコ・アメリカ）、2019 年「現代美術 in 豊川 series 5 未来への回路」豊川市桜ヶ丘ミュージアム（愛知）、2014 年「COLOR, MOTION, FORM, SUMMER ADVENTURE IN ART」神奈川県立近代美術館 葉山。

猪狩雅則／ IGARI Masanori
1975 年愛媛県生まれ、三重県出身。2003 年愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。現在、愛知県立芸術大学美術学部油画専攻准教授。近年の主な展覧会に、2020 年個展「猪狩雅則 | 葉は葉 絵に」See Saw gallery + hibit（愛知）、2017 年「落石計画第 10 期 クロニクル 2008–2020 – 痕跡 と展開 –」旧落石無線送信（北海道）、2014 年個展「猪狩雅則 絵画展」gareco（愛知）。

名古屋芸術大学

task（p.14）
青田真也／ AOTA Shinya
身近な日用品など、さまざまなものの見慣れた表層をヤスリで削る作品シリーズを中心に、本質や価値を問い直す作品を制作。名古屋港エリアのアートプログラムやフェスティバルの共同ディレクターも務める。

青木一将／ AOKI Kazumasa
現代美術のインストーラーチーム、ミラクルファクトリーとして、作品を効果的に見せるための展示設営や、アーティストの作品の構想を可視化・具現化するための制作補助などを行っている。

秋吉風人／ AKIYOSHI Futo
描くという行為への執着と共に「絵画」という概念の解体と再構築を実験的に続け、複数の絵画シリーズとして展開している。

大田黒衣美／ OTAGURO Emi
身の回りの素材を扱い、個人的な感情を通して垣間見える、日常に潜む説明しがたい出来事や、正気と狂気の狭間の人間の精神のあり方を考察した作品を発表している。

田村友一郎／ TAMURA Yuichiro
既存のイメージやオブジェクトを起点にしたインスタレーションやパフォーマンスを手掛ける。土地固有の歴史的主題から身近な大衆的主題まで着想源は幅広く、現実と虚構を交差させつつ多層的な物語を構築する。

西田雅希／ NISHIDA Maki
国内外でキュレーションと批評活動を行っている。多種多様なものが同時に存在する環境への興味から、コミュニティと創造に関する研究も積極的に行っている。

三宅砂織／ MIYAKE Saori
誰かが見たものとして既にある画像を源泉に、フォトグラムや映像などを用いて制作している。人々の眼差しに内在する「絵画的な像を多声的に抽出する 」という試みを展開している。

本山ゆかり／ MOTOYAMA Yukari
絵画を構成している要素を分解しながら、絵画をつくる／鑑賞するときに起きる出来事をつぶさに見つめる作業をしている。

吉田有里／ YOSHIDA Yuri
アートセンター、国際芸術祭、アートプロジェクトなどでの企画、コーディネート、運営を行う。名古屋港エリアのアートプログラムやフェスティバルの共同ディレクターも務める。

渡辺英司／ WATANABE Eiji
図鑑から切り抜かれた植物や蝶のインスタレーションや、彫刻や絵画など、さまざまなメディアを用いた作品を発表。ギャラリースペースの改修・企画を行い、若手や海外作家の発表の機会を提案するオーガナイザーとしても活動している。

Street Capturing in Nagoya 藤幡正樹×名古屋芸術大学（p.30）
藤幡正樹／ FUJIHATA Masaki
80 年代初頭からコンピュータ・グラフィックスとアニメーションの制作、その後コンピュータを使った彫刻の製作を経て、90 年代よりインタラクティヴな作品を発表。1995 年インタラクティヴな本をテーマにした作品《Beyond Pages》。現在は東京藝術大学名誉教授。2017 年オーストリアのリンツ美術大学、2018 年香港バプティスト大学の客員教授として滞在。2021 年名古屋芸術大学デザイン領域特別客員教授。

舞台を見つめる ~ 言葉と身体と音が織りなすドラマ ~（p.56）
第七劇場／ Dainanagekijo
1990 年、演出家・鳴海康平を中心に設立。主に既成戯曲を上演し、言葉の物語のみに頼らず舞台美術や俳優の身体とともに多層的に作用する空間的なドラマが評価される。国内外のフェスティバルなどに招待され、これまで国内 25 都市、海外 5 ヶ国 11 都市で作品を上演。2014 年、東京から三重県津市美里町に拠点を移し、倉庫を改装した新劇場 Théâtre de Belleville のレジデントカンパニーとなる。

月灯りの移動劇場／ Moonlight Mobile Theater
2015 年に名古屋で創設したダンスカンパニー。「モノづくり＋舞台芸術」をテーマに、オリジナルの移動劇場を数多く製作し作品を発表。2017 年には、グッドデザイン賞を受賞。2020 年に製作・発表したソーシャルディスタンス円形劇場《Peeping Garden》はコロナ禍における新たな鑑賞形式として注目を集め世界 35 ヶ国以上のメディアで取り上げられた。全国 10 都市で上演。

名古屋造形大学

流れて描く（p.12）
近藤香里／ KONDO Kaori
2017 年　名古屋造形大学大学院 造形研究科 修士課程 造形専攻修了

柴崎あかり／ SHIBASAKI Akari
2018 年　名古屋造形大学 大学院 造形研究科 修士課程 造形専攻修了

山口由葉／ YAMAGUCHI Yuiha
2018 年　名古屋造形大学大学院 造形研修科 修士課程 造形専攻修了
2020 年　東京藝術大学大学院 美術研究科 修士課程 絵画専攻修了

ふへほ展（p.22）
蓮沼昌宏／ HASUNUMA Masahiro
1981 年東京都生まれ。美術作家。記録写真家。2010 年東京芸術大学大学院博士課程修了。絵画やアニメーション、キノーラ装置などを表現手段とする。いろいろな場所に滞在し、発見・経験した物事から新たなストーリーを紡ぎ出す。近作では、光る絵画など、これまでにないモダニスティックな展開を見せている。

鷲尾友公／ WASHIO Tomoyuki
1977 年愛知県生まれ。造形業、塗装業を経てイラスト、デザイン、写真、絵、コンテ、壁画や絵画などを手がける。オリジナル・キャラクター「手君 (TEKUN)」は立体や映像作品にも登場し、メディアを横断する作家のセルフ・ポートレートにもなっている。近年は、絵画作品を精力的に手がけている。

天才の幽霊（p.54）
井上暁登／ INOUE Akito
1996 年、長崎県生まれ。2019 年、名古屋造形大学造形学部造形学科洋画コース卒業。主なグループ展：2019 年「欲望の玉響 / 玉響の欲望」（ゲンロン五反田アトリエ / 東京）、「 Future Artist Tokyo ~ERLection of Anonymous」（東京国際フォーラムロビーギャラリー / 東京）2018 年「Frame」（名古屋造形大学内 D-1 ギャラリー / 愛知）

小粥幸臣／ OGAI Yukiomi
1987 年、愛知県生まれ。2009 年、名古屋造形大学美術学科彫刻コース卒業。主な個展：2010 年～ 2015 年（☆ Star gallery / 愛知） 主なグループ 展：2022 年「SPACE WITHOUT BOUNDARIES - Wriring and Movement」（Hebel_121 / バーゼル）、2019 年「蚊帳の外 Kaya no Soto（Out of the loop）」（Hebel_121 / バーゼル）、2018 年「Anagama Project 2018」（小牧市民交流館 / 愛知）

MITOS
1985 年生まれ。2008 年、名古屋造形芸術大学美術学科洋画コース卒業。主な個展：2022 年「清須市はるひ絵画トリエンナーレアーティストシリーズ Vol.97 」、「MITOS 展 静寂のリズム」（清須市はるひ美術館 / 愛知） 主なグループ展：2022 年「瀬戸現代美術展 2022」（菱野団地各所 / 愛知）。受賞歴：2022 年「Idemitsu Art Award 2022」入選

名古屋学芸大学

風景をうつす／ Reflecting the landscape and memory（p.52）
弓指寛治／ YUMISASHI Kanji
名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科 卒業、名古屋学芸大学大学院 メディア造形研究科 修了。ゲンロンカオス * ラウンジ新芸術校の第一期生として学んでいた 2015 年に、交通事故後で心身のバランスを崩していた母親が自死。それをきっかけに、「自死」や「慰霊」をテーマとし創作活動を続けている。

幸 洋子／ YUKI Yoko
名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科 卒業、東京藝術大学大学院 映像研究科アニメーション専攻修了。日々の出来事をもとに、様々な素材で作品を制作している。 最新作『ミニミニポッケの大きな庭で』(2022) が第 75 回ロカルノ映画祭でプレミア上映される。

南條沙歩／ NANJO Saho
名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科 卒業、京都市立芸術大学大学院 美術研究科 絵画専攻構想設計修了。身体感覚を意識しながら、断片的な記憶を気配として描写するような手描きアニメーション作品を制作している。また、フリーのアニメーション作家として多数のミュージックビデオを制作している。

樋口誠也／ HIGUCHI Seiya
名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科 卒業、名古屋学芸大学大学院 メディア造形研究科修了。現在、名古屋学芸大学 映像メディア学科助教。実物ではなく敢えて「映像 (イメージ)」を介して見たくなることに関心があり、写真・映像を扱った作品を制作している。写真新世紀 2020 にて、グランプリを受賞。

伏木 啓／ FUSHIKI Kei
名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科 教授。時間意識における線形性と非線形性の重なりを主題として、身体と映像などのメディアを複合的に扱ったパフォーマンス / 舞台作品や、特定の場所の歴史的、空間的特徴にアプローチした映像インスタレーションなどを制作している。

村上将城／ MURAKAMI Masakuni
名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科 講師。風景という言葉だけでは回収できない、人の営みによってもたらされる多様な視覚性としての原風景を、写真で記録することを試みている。

山本努武／ YAMAMOTO Tsutomu
名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科 准教授。景観や空間を扱った視覚芸術作品を制作。近年は認知心理学における実験や問題を作品要素に引用し、芸術体験とヒトの認知機序の関係性について研究している。

井垣理史／ IGAKI Masashi
名古屋学芸大学 メディア造形学部 デザイン学科 准教授。空間表現が専門。様々な素材を用いて「際」や「間」を浮かび上がらせるインスタレーションを制作。また、パフォーマンス / 舞台作品の空間構成や美術を担当し、身体や映像との関わりによるオブジェクトを制作。

連携協力

メセナ事業におけるメディアアート展示アーカイブ（p.16）
四方幸子／ SHIKATA Yukiko
キュレーティングおよび批評。京都府出身。多摩美術大学・東京造形大学客員教授、IAMAS・武蔵野美術大学非常勤講師。オープン・ウォーター実行委員会ディレクター。データ、水、人、動植物、気象など「情報の流れ」から、アート、自然・社会科学を横断する活動を展開する。

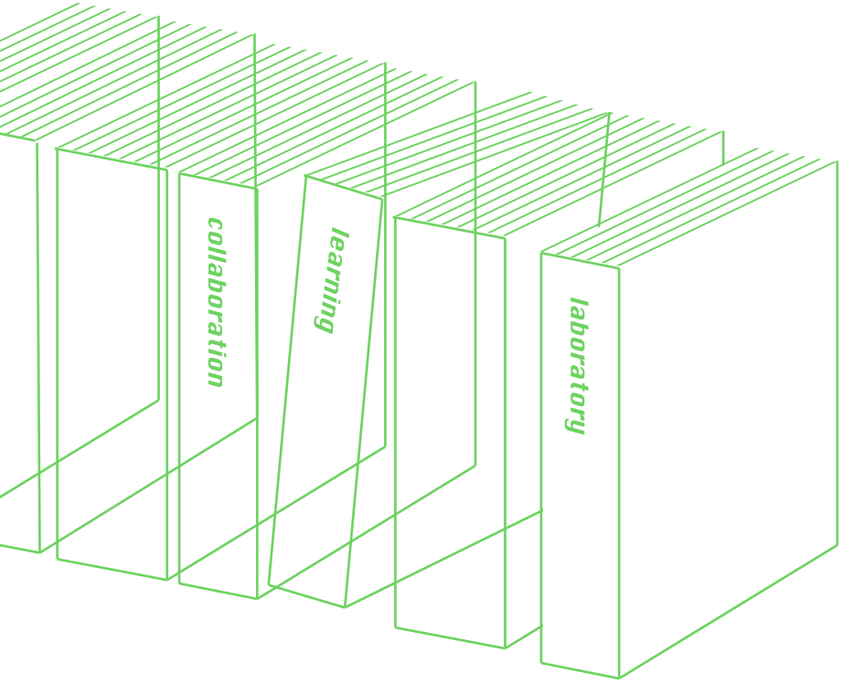
キヤノン株式会社「キヤノン・アートラボ」
1991 年から 2001 年まで、都内各地で新制作のメディアアートを発表した。キヤノンのエンジニアとアーティストのコラボレーションによるアートプロダクション制作と企画展示を主眼とした。国際的な先鋭アーティストを多数起用した。

スパイラル / 株式会社ワコールアートセンター
1985 年にアートプロデュース事業の拠点として設立された。1987 年、1989 年、1992 年に「ビデオ・テレビジョン・フェスティバル」の開催場所となるなど、先駆的なメディアアート発表の場として機能したスパイラルは、主催事業として、ダムタイプの連続的な作品発表、クリスティアン・メラーの個展などを企画した。

株式会社資生堂「CyGnet」
1998 年 8 月から 2003 年まで株式会社資生堂がインターネット上で展開していたサイバーギャラリー。ネット上でしか成立しない新しいアートを紹介する実験的なサイト。CyGnet のためにアーティストが新作を制作した。

甕々の声 (AICHI ⇆ ONLINE オンサイト＆オンライン彫刻プロジェクト）（p.18）
黒川岳／ KUROKAWA Gaku
1994 年島根県生まれ。2016 年東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科卒業、2018 年京都市立芸術大学大学院彫刻専攻修了。物や環境と身体との関係に着目し、彫刻やパフォーマンス、音楽などの作品を制作している。近年の展覧会に、「ニューミューテーション #3」（京都芸術センター、2020 年）、「京芸 transmit program 2019」（京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA、2019 年）などがある。

西田雅希／ NISHIDA Maki
慶應義塾大学文学部美学美術史学専攻卒業。ロンドン大学美術史学修士課程修了。2007 年に渡英後、美術大学、美術館からコマーシャルギャラリーまで、公と民のさまざまな組織でアートの仕事に携わる。あいちトリエンナーレ 2016 アシスタント・キュレーターを経て日本に拠点を移し、以降国内外でキュレーションや執筆、リサーチを行う。



ART LAB AICHI

アートラボあいち運営体制

ディレクター｜服部浩之

コーディネーター｜近藤令子、半澤奈波（2022 年 4 月〜12 月）

スタッフ｜小川愛（2017 年 5 月〜2022 年 10 月）、城所豊美（2018 年 4 月〜）、

岡本涼伽（2018 年 12 月〜）、大場美葵（2022 年 11 月〜）

連携大学｜愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学、名古屋学芸大学

助成｜一般財団法人地域創造（2021 年度、2022 年度）

運営｜国際芸術祭「あいち」組織委員会

アートラボあいち　2020-2022 報告書

編集｜近藤令子

編集サポート｜半澤奈波、城所豊美、岡本涼伽、大場美葵

執筆｜服部浩之

写真｜城戸保（p8 下 ,14,15）、園田加奈（p10,11）、谷澤陽佑 (p26-29,32 上 ,34-51)、

半澤奈波 (p20 下 ,24,25)、藤井昌美 (p12,13,20 上 ,22,23,52-59)、三浦知也（p8 上 ,18,19）

デザイン｜谷澤陽佑

発行｜国際芸術祭「あいち」組織委員会

2023 年 3 月発行